

# きのこの生産と消費について



林野庁林政部経営課特用林産対策室長  
塚田 直子

平素より、森林・林業行政の推進にご理解とご協力を賜り、御礼申し上げます。今回、きのこの生産と消費について寄稿の機会を頂戴しましたので、この機会にきのこをめぐる事情について紹介させていただきます。

## 1. はじめに

私たちが日常食べているきのこは、微生物の真菌類がつくる糸状の菌糸が集まって塊状になったもので、植物では果実や花に相当する器官です。

食用のきのこには、森林等に自然に生える野生のきのこ、原木栽培、菌床栽培等の栽培きのこの両方が含まれますが、ここでは、栽培きのこについて紹介します。栽培きのこの産出額は、林業産出額のおよそ4割を占めており、山村地域の経済において重要な役割を果たしています。

と確立されました。

1960年に年間およそ4万トンだった生産量は、2010年までの50年間で47万トンまで拡大し、2022年の生産量はおよそ46万トンとなっています。

品目毎に見ますと、最も生産量の多いえのきたけが12.6万トン、次いでぶなしめじの12.3万トン、3位の生しいたけが7.0万トンとなっています。生産額では生しいたけが最も多く、次いでぶなしめじ、まいたけの順となっています。

## 2. きのこの

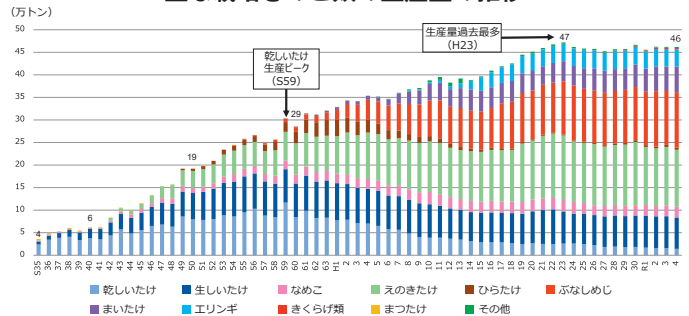
## 生産と消費について



日本は中国に次ぐ世界第二位のきのこ生産国であり、我が国における栽培きのこの歴史は、17世紀のしいたけ栽培にさかのぼります。当時は丸太に鉋で刻みを付けて、しいたけの胞子が自然に着生するのを待つという偶然性に頼る方法でしたが、1942年、群馬県桐生市出身の森喜作が、くさび状の小さな木片に菌糸を伸張させた「種駒」を丸太に打ち込む「種駒法」を発明したことで、しいたけ栽培は飛躍的に普及しました。

その後、おが粉や小麦ふすまなどを使った菌床栽培技術が開発され、しいたけのほか、なめこ、えのきたけ、ひらたけ、ぶなしめじ、まいたけなど様々なきのこの栽培方法が次々

主な栽培きのこ類の生産量の推移



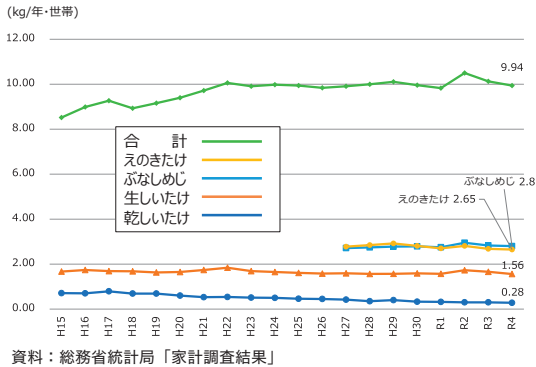
資料：農林水産省「特用林産基礎資料」

主に原木栽培で生産される乾しいたけについては、安価な中国産乾しいたけの輸入量の増加や原木価格の高騰、生産者の高齢化等により、1984年をピークに長期的に国内生産量が減少し、現在は国内消費のおよそ7割が中国からの輸入で占められています。

乾しいたけのほか、きくらげ類も国内消費のおよそ9割が中国産となっていますが、きのこ類全体の自給率は89パーセントに及びます。消費量は2010年頃にかけて増加傾向にありましたが、2011年以降はほぼ横ばい、2023年の世帯あたりの年間購入量は9.9kgとなっています。栽培きのこの原点とも言える

乾しいたけについては、国民の食生活の変化に伴い長期的に消費量が減少傾向にあり、世帯当たりの年間消費量は生換算で0.3kgとなっています。

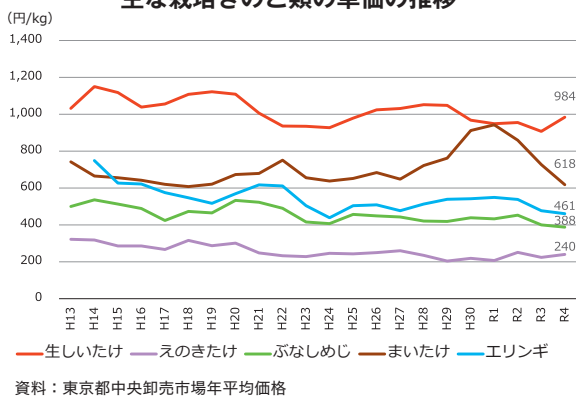
きのこ類の年間世帯購入量の推移（二人以上の世帯）



### 3. きのこの流通について

近年、スーパー等で出回っているきのこの多くは、えのきたけ、ぶなしめじ、生しいたけ等の生鮮きのこ類ですが、これらは、青果市場など生鮮野菜とほぼ同様の流通を経て私たちの食卓に届きます。栽培方法は主に菌床栽培で、長年の技術開発により高度に生産が効率化されています。特にえのきたけ、ぶなしめじ、エリンギといった瓶栽培のきのこは、低価格での通年生産が可能となっていますが、その一方で、卸売・小売価格が低迷し、エネルギー価格や人件費の上昇等で生産コストが上昇する中、価格転嫁をいかに実現するかが大きな課題となっています。

主な栽培きのこ類の単価の推移



### 4. きのこの輸出動向

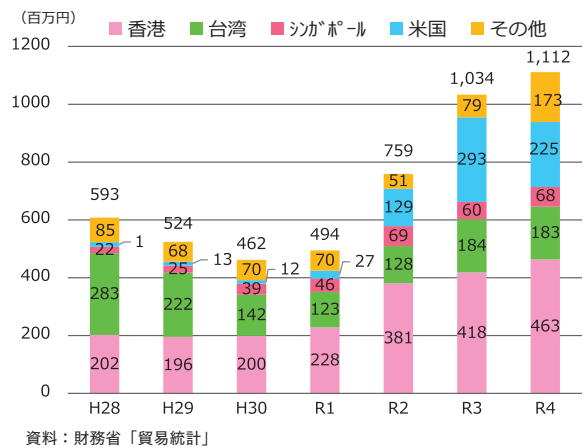
きのこの輸出額は2019年以降毎年増加を

続けており、2022年の輸出額はおよそ11億円となっています。日本産農産物の輸出額全体と比較するとごくわずかですが、今後の伸びを期待したいところです。

乾しいたけについては、9世紀頃から日本産の天然物が中国に輸出されていたと言われ、現在でも日本産の原木乾しいたけは香港、台湾、シンガポールなどの中華料理文化圏で高級品として根強い人気があります。昨今の世界的な健康志向やビーガン市場の拡大も追い風に、欧米各国や中東地域への輸出に挑戦する事業者も見られるようになってきました。

生鮮きのこについては、香港、台湾などの近隣国を中心に輸出量が増加を続けており、近年は北米向けの輸出量が増加しています。欧州や中東地域等、今後の輸出先の拡大には鮮度保持が大きな課題となりますが、高品質な日本産きのこの付加価値をアピールすることによる輸出量の拡大が期待されます。

きのこ類の国別輸出額の推移



### 5. おわりに

きのこ類は年間を通じて安定した価格で流通し、栄養面や機能性の面からも国民の日常に欠かせない食品です。しかし、近年はロシアによるウクライナ侵攻に伴う燃油・電気代、生産資材費等の高騰や担い手の不足等により、生産環境が厳しさを増しています。林野庁では、省エネ化に資する施設整備の導入支援や次期生産に必要な生産資材の導入費の一部支援に加え、担い手の確保に向けた人材育成のための支援等を実施しているところです。本稿を通じて、きのこをより身近に感じていただき、食卓にもう一皿、きのこを加えていただければ幸いです。